

学生個々のパーソナリティが教材の読み解き方に反映する

- 鑑賞ビデオの感想文における内向型と外向型の差異 -

九州大学高等教育総合開発研究センター 長野 剛

1. 問題の提起

講師が毎回交代する講演形式の授業において、「制限時間内に授業レポート（所与の課題のない感想）を書き終えることができなかったから」と、授業アレンジ教員の研究室に、それぞれで授業レポートをもってきた学生が3名いた。この3名の感想は、いずれも、講師の考えと意見では見落とされていた事柄について指摘したものだ。感想を「そうではない（否）」と批判的に書く¹⁾となると時間が足りなかったにちがいない。もちろん、この回の講演がどの学生にも批判的に受けとめられたわけではない。とても説得力のある講演で、「そのとおりだ（諾）」と溜飲がさがった²⁾という感想も多かった。

同じ講演（あるいは、授業）についての感想が否文と諾文³⁾になるのが、何に由来するかは、授業担当者として常々問うところである。とりわけ、ある帰結を正答であると学生に教えることが知の営為にたずさわる者のモラルとして躊躇される授業、つまり、何らかの問題⁴⁾を「私は、これらの資料を、こうした観点から、このように検証して、こう考えるに至りましたが、あなたは？」と教師が学生に投げかける授業において、学生は各人各様があたりまえと片づけては、対話（双方向性）⁵⁾のある授業にならない。一人でも多くの学生を個として尊重しようとする⁶⁾にあたり、学生それぞれの理解の有様を知ろう⁷⁾とする姿勢を放棄することになる。

もちろん、多人数のレポートを評価するとき、学生それぞれの理解の有様に想いをめぐらすのは無理難題である。また、レポートの評価基準をシラバスに明文化しようと試みる教師は、学生の自己認知（「...したつもり」）とあべこべに、「授業を聴いていない」「肝要なところがわかっていない」「きちんと考えていない」、はたまた、「（能力が）劣っている」と見なす根拠の危うさに気づいている。評価基準に論理的思考を採りあげるとしても、この基準は、その有・無を二者択一的に分類評価できても、その達成水準を段階評価するのは困難である。さらに厄介なのは、レポートの結論が、教師が丹念に検証してたどりついた見解と相容れないものだ、論理的思考に不備や欠落があると評価しかねないことである。多人数のレポートを評価する場合に、教師は、強引な評価に陥らないように自らをコントロールすることに疲弊してしまう。こうした危うさを回避するために、公平を期して、出席回数で学期末の成績評価を済ますほど、教師には、おざなりな授業をしているつもりはない。

問うことを生業にしている教師の葛藤状態に対するトレランス（耐性）は高いが、学期末のたびに、評価基準に踏ん切りをつけなければならない。踏ん切りのつけ方のひとつとして、授業レポートを学生個々に綴じて読み通すと、授業担当者や授業内容に溜飲をさげない（否文を書く）学生のなかにこそ、授業レポートが回を追って変容し、（筆者の眼には）学びつつあると映る学生が

いる。本稿は、授業レポート（所与の課題のない感想文）を 諾 文で書くか 否 文で書くかが、学生それぞれの向性⁷⁾の違いに関係していると仮定した対照的検討である。

2．感想文の向性指数に応じた特徴

教師が「今回のレポートは評価します」と告げ、テーマが与えられたレポートには、学生たちの紋切り型の思考が見出される。それは、①多くの事象におおまかに当てはめることのできる知識は、事象それぞれを厳密に説明する知識よりも優れているという前提に拠る思考と、②社会や環境に応じて、いわばその時々に変化する事象よりも、いかなる時にも変化しない事象が採りあげるに値するという前提に拠る思考である。もちろん、学生は、諸々の事象が変化しないと思っているわけではない。習性化しているという点で無意識のうちに、事象には頭の中で考えるだけで捕捉できる不変が隠されている、としていることが紋切り型思考につながっている。成績評価の対象となったレポートは、常識の 諾 が得られる紋切り型思考を頼りにして、不変（同じ）という確実性を変化（違い）の観察において捉えようとせず、そこに至る過程の説明なしに用意された結論を目指して書かれる傾向がある。したがって、紋切り型の思考によって妨げられる以前の学生それぞれの認知は、成績評価の対象になっていないレポート（感想文）に直接的に現われやすい。

以下において、授業での解説を補足するためのビデオ（『NHKスペシャル・シリーズ変革の世紀』からNPOやNGOの紹介部分を15分ほど抜き出したもの）を観た感想文に、外向型学生と内向型学生とで、対照的な違いが見出されることを紹介する。

向性指数の算出に用いたのは、淡路式簡易向性検査である。向性指数（VQ）が小さければ内向型となり、向性指数が大きければ外向型とみなされる。「コミュニティ活動の心理学（16年度後期）」という授業で145名の履修学生の向性指数の平均値は112.2で、その度数分布は平均値を中心にほぼ正規分布のかたちになった。

向性指数と、その向性指数の学生が出席カードの裏面に書いた感想の全文を示し、向性（タイプ）理論の観点から各感想文の特徴を指摘する。外向型の学生の感想文においては、内向型のそれとの違いを対照的に説明するために、内向型であると想定した場合の解説を加える。なお、以下に示した感想文は、向性指数が小さい（内向型の）順に8名を、向性指数が大きい（外向型の）順に8名をとりあげたもので、向性に応じた特徴をもつ感想文を抜き出したものではない。

【内向型】

VQ = 58 の学生の感想文 『最後に紹介されたメールの中で「将来の人に対して恥ずべき…」というような言葉が出てきた。その人の言いたいことがわからないわけではないが、その言葉がなんとなく気になった。問題点なのかわからないが、少し違和感を覚えた。』

特徴：外在の集団や組織の活動の様子（全体）よりも、個別の内在の事柄（部分）を思考のきっかけにする内向型として、とあるメールのとある箇所（メールの書き手の内的事象）に注目している。また、まずは 否 と応じる内向型として、他の誰でもない私の『違和感』（否）をとりあげている。

VQ = 64 の学生の感想文 『正式な国交を結んでいない国に対する支援における交渉。その国

への移動手段は？例えば北朝鮮などにはどうやって支援をしているのか？』

特徴：概ねよりも先ず特異さに注目する内向型として、全体として順調な事象よりも、全体からすると例外となっている妨げ、困難、問題に注目し、『正式な国交を結んでいない国』を念頭に浮かべている。大半を、ふつう、あたりまえ（ 諾 ）とするなら、例外は、ふつうでない、あたりまえでない（ 否 ）ことになる。

VQ = 68 の学生の感想文 『有名なNGOに触発され、自分の活動は正義だと信じ、冷静な判断の出来ない未熟なNGOの危険性。』

特徴：個々人の性質が組織の性質を方向づける、つまり組織よりも個を優先し、個に価値をおく内向型として、集団については、ネガティブな面が 否 と気にかかる。外在する組織であるかぎり、きちんとした成果をあげたNGOでなく『有名なNGO』であり、NGOは好影響を与えるのでなく『NGOに触発される』NGOが受動的に登場することになる。

VQ = 68 の学生の感想文 『NGO, NPOは職業になるのか。ボランティアとはどう違うのか？』

特徴：類似（共通点）を 諾 と見出すよりも、先ずは 否 と応じるかのように、疑問、この文では一般的職業との差異、ボランティア活動との差異から思考をはじめている。

VQ = 76 の学生の感想文 『人の為に何か活動を起こすのは確かに素晴らしい。けれどやはり自分の生活が第一であり、それを満たせずにそういう活動をする人はほとんどいないだろう。そう考えると、もし自分が活動しようと呼びかけても誰も集まらず、結局は不成立になると思われる。また日本の都会である地域では近所の住民との関係が築けず（自分もそうであるが）住民が協力して大きな事をなすのはものすごく大変であり成功は難しいと思う。』

特徴：先ず 否（「そうかなあ」と）応じる内向型は易動性が低い。『そう考えると...』以降は、外来する公的（信用のおける）他者からの働きかけに応じる外向型に対して、「私」に引き寄せて、『自分が活動しようと呼びかけても...』と思考し、『自分もそうであるが』と「私」という但し書きを添えて、個々の営為によって住民集団の行動を方向づけようとする内向型の流儀の難しさについて想像している。NGOやNPOに参画している人々が大勢いることをビデオで観ても、『人の為に...ほとんどいないだろう』と懐疑的に 否 と受けとめるのは、登場人物が大勢であり、外在する「私」ではないからだろうか。

VQ = 80 の学生の感想 『相当立派なプロセスを組んだ資料を見せなければ出資者を募る場合、相手はなかなか信用してくれないと思った。寄付金を不正に使う可能性はあるのに、それを誰が管理しているのか。外国に資金を援助する場合、援助する側とされる側の意思は一致しているのか。』

特徴：外向型が、外的表われとなった結果の数値に注目するのに対して、内向型は、見える結果よりも、見えないという点で内在的であるプロセスに注目する。内向型が『出資者を募る』と書く際に想定しているのは、大勢を対象にした「広報」でなく、個を対象にしてなされる「説得」である。また、差異に注目する内向型の特徴が、『...意思は一致しているのか』と、不一致に思考のきっかけを見出すというかたちで示されている。

VQ = 88 の学生の感想文 『行政に頼らずにやっていけるとは思ってもいなかったが、ビデオ

を觀て市民の力というもののすごさが、少しながら実感できた。自分の住んでいる地域にも、このような人がいたらいいと思うと同時に自分もその一人になればと思う。』

特徴：行政のような外在する機能に頼らなくても、個々人の参画によって形成された市民集団によって物事が動くということを知り、内向型としての自己効力感（self-efficacy）が高まったことがうかがえる。「私」の身近にいてほしいのは『このような人』であり、『このような人達（人々）』ではなく、『自分もその一人になれば』と、「私」が自己関与することを想っている。思考が、社会や組織のあり方についてではなく、「私」がどうするかからはじまっている。VQ = 88 の学生の感想文 『NGOは一般に「人のために何かをしたい」「優しい」人たちというイメージが少なからずあるのではなかと思うが、そのうち「NGO」という肩書きを使って資金集めをしたりする人間が出てくるのではないかという思いもある。NGO内における透明性も知った上で私達はそのような活動に参加するべきではないか。』

特徴：向性指数が88になって、はじめて『私達』という言葉が出現している。しかし、この『私達』はあくまでも、『人のために何かをしたい』人や『優しい』人が集まった『私達』である。『肩書き』という外的に付与されたものを頼りに動く人に対する用心が記述されている。さらに知りたいのは、NGOの誰の目にも明らかな結果よりも、その内部の様子についてである。

【外向型】

VQ = 168 の学生の感想文 『外務省の人は一週間で一体何がわかるのだろうか。職員の福利厚生とか職場環境の向上を求める動きが起こったらどうなるのか。金銭的な見返りはいらなくても実際は人それぞれ程度が違うと思う。NGOがやろうとしていることにみんな賛成してくれればいいが、市民が少しでも反対したらやりにくくなるのではないか。』

特徴：誰が共有する尺度を重要視する外向型としては、量として測定可能な時間と金銭は、いわば思考の論理則として不可欠である。『一週間』でなく、二週間、そして一ヶ月と時間が長くなるなら物事が『わかる』とか、『金銭的』見返りの『程度』という捉え方は、質という内在的判断よりも量という外在的判断に意味を見出すが移行型のものである。また、『職員の福利厚生』『職場環境』は、個々人の内的事象でなく組織に付与された機能についての言及である。さらに、『みんな賛成してくれればいいが、少しでも反対したらやりにくくなる』というのは、反対する個人よりも全体の調和や一貫性のほうを重視する外向型の思考である。

内向型であれば：『わかる』ことと費やした時間とを関連づけない。なぜなら、内向型は物事を知るには内的過程である洞察の働きが重要であると思うからである。また、内向型であれば、（行政や法といった外からの働きかけに重きをおかず、広報を先ず 否 と受けとめるので）反対する市民の一人ひとりの説得という労を費やしてまでして一緒にやろうとは思わず、賛成する市民だけで、できる範囲で取り組むのが理にかなっていると考える。

VQ = 156 の学生の感想文 『人がどのくらい集まるか（ボランティア社員）？活動の拠点はどこにするのか？活動することで本当に相手（国）の役に立っているのか？何から始め、どこから手をつけるのか？支援の方法は？』

特徴：外向型として、『人がどのくらい集まるか』と量（人数）から思考をはじめている。そし

て、『活動の拠点をどこにするか』は効果的に成果をあげるうえで重要なことである。外向型が念頭においている『本当に相手(国)の役に立っているのか?』の判断は材料としては、資料として具体的に示せることである。『何から始め、どこから手をつけるのか?支援の方法は?』は、皆で共有するマニュアルについての思考のはじまりである。外向型は、具体的にどうすればよいか、いわば方策(how to)をめぐって思考する。

内向型であれば：人数よりも、集まった個々人それぞれの力量や専門性について想いをめぐらす。誰が集まるかによって何をすることが方向づけられ、有能な個人は一人で五人分の仕事ができるはずと思っているからである。内向型は、活動の拠点がどこにおかれるにしろ、まずスタッフそれぞれの心に拠点(活動の源)があるという思いを、無意識のうちに大切にしている。また、内向型にとっては、NPOやNGOが何(what?)であるかについて想いをめぐらすことも行為とみなされるのに対して、外向型にとってはhow toとして外在化されるものが行為である。VQ = 152 の学生の感想文 『寄付を募っている人たちが、皆信頼できるとは限らない。やはり何らかの利益やおいしさが必要だと思う。』

特徴：信頼できない個人がいることでなく、『寄付を募っている人たち』の『皆』を信頼できないことが問題となっている。おそらく、『何らかの利益やおいしさが必要だ』としているのは、外向型にとって「私」でなく、『皆』なのであろうし、『利益やおいしさ』は、『皆』が共有する金銭や時間にかかわっているのだらう。外向型は、皆が類似し同一であることを前提(望ましい・あるべき姿)としている。

内向型であれば：内向型にとって、信頼できないのは寄付を募っている人たちの中の個人であり『皆』ではない。内向型の否定は、部分否定の傾向をもっているが、外向型の否定は全体否定の傾向をもっている。内向型は、何をもってして利益やおいしさとするかは個々人によって異なることを前提としている。

VQ = 148 の学生の感想文 『人員確保は十分なのか?』

特徴：外向型としては、先ず『人員』(数)について、それが十分か不十分かを考える。

内向型であれば：内向型は量よりも質が気になる。個々の『人材』としての力量や得意とすることに注目する。内向型が、『人員』と『人材』の区別にこだわるのに対して、外向型は両者を区別することに意義を見出さないのかもしれない。

VQ = 144 の学生の感想文 『NGOの活動がこれほど日本で行われているとは思わなかった。もっとNGOの内容を知っていきたい。風力発電の話は市民を中心にして成り立っていることは素晴らしいと思った。』

特徴：外向型が知りたいのは、NPOに参画している個々人(の体験)でなく、NPOという集団(組織)の活動についてである。そして、外向型は組織の活動に、先ず『素晴らしい』と 諾を見出すことになる。風力発電の中心となっている『市民』とは、ビデオのインタビューでそれぞれの思いを語っていた登場人物一人ひとりのことではなく、登場人物をひっくるめた『市民』であろう。

内向型であれば：ビデオに登場し、風力発電に参画した人物の体験談から思考をはじめ。

VQ = 144 の学生の感想文 『NGO, NPOは同じ目標をもった人の型にとらわれない団体

と言えると思うが、こういう団体が増えるにつれ、それらを把握し統括する機関なり体制を整えなくてもいいのでしょうか？実態や活動内容まで把握した上での管理が行われないと型にとられない団体の名のもとに犯罪が起こる危険性もあると思います。』

特徴：外向型としては、『型にとられない』組織は、公に意義のあるものとして把握するにあたって問題となる。したがって、全体として（整合性のあるものとして）『把握し統括する機関なり体制』が不可欠だと考える。また、『把握し統括する』のは（例えば、有能な）個人でなく、『機関なり体制』である。

内向型であれば：全体を『把握し統括する機関なり体制』や『管理』においては、個々人それぞれで異なった内的な体験過程や思いが看過されるのが気にかかる。内向型が『統括』や『管理』を承服するのは、やむをえないからである。内向型は、『統括』や『管理』を必要としない活動を希求するので、外向型からすると、リアリティがないことになる。

VQ = 136 の学生の感想文 『資金的に不利な人々は参加したとしても寄付などできず、参加しづらいのではないかと。自分はこのNPO、NGOの実態をこのビデオで初めて見たように感じたが、まだまだ未知な人が多いはず。より知ってもらうための対策は？』

特徴：外向型の価値は、それが皆と共有できるかぎりにおいて意味がある。集団メンバーと同等の寄付ができることによって、集団に加わることになる。『資金的な不利な人々』と括って捉えるのも外向型の特徴である。また、『NPO、NGOの実態をこのビデオで初めて見た』私が、さらに知ろうとするよりも、『まだまだ多いはずの未知な人』に知ってもらうための『対策』、つまり外への働きかけに関心を向けている。

内向型であるなら：内向型は、寄付金額が寄付者個々人にとってどんな意味をもっているかを考える。内向型は、不特定多数の人々への広報よりも、多額の寄附をした大人がいる一方で、千円を寄附した中学生とパートナーであろうとすることに腐心する。

VQ = 136 の学生の感想文 『NPO、NGOという言葉は最近よく聞くものの具体的にどんなものを指すのかは知らなかった。様々な種類の団体があることに驚いた。ネット上でメンバーを募り団体を結成するとしたらインターネットを持っていない人は時代に取り残されるのではないかと。また、危険な思想の持ち主がリーダーになる可能性はないのか？市民が一個人として役割を果たせる社会は素晴らしいが、考える能力が乏しい者が社会的弱者になりはしないか。』

特徴：外向型としては、『ネット上で募られたメンバーが結成する団体』を 諾 として承認したうえで、個々人を、こうした団体の（ポジティブな）社会的意義を損なう『危険な思想の持ち主』や『弱者』として想定する。社会について『考える能力が乏しい』がゆえに『弱者』という捉え方も、外向型の個に対する消極的ないしネガティブな価値づけによってもたらされていると思える。

内向型であるなら：多様性をいかに許容するかを課題にしている内向型は、さまざまな種類があることに真実味を覚える。個人に影響を及ぼす時代の動向よりも、それに左右されないようにするには個人としてどうあるべきかを考える内向型は、『時代に取り残される』と心配する外向型の人のことを、時代という外的環境の影響を受けやすく、流される（翻弄される）人とみなし、外向型の人の『社会的弱者』という言い方は、個に対する尊厳を省みない雑駁な思考の

表われたと捉えるかもしれない。

向性指数が90以上の感想文は、思考の起点となる視点の置きどころが、つまり、用いられる言葉が外向型のものと同じになり、両向型の特徴が文章として対照的でなくなる。本来、内向型であった学生が、感想文であってもそれが評価されるなら、外向型として書くようになっているのはなぜかについて、次に考察する。

2. 否 と、ひきこもって考える内向型の学生

学生生活就学相談室の連なりに設けられたブラウジング・ルームに、吉本隆明著の『ひきこもれ』という本が置いてある。思索は独りで行うものであり、皆と一緒に「そうだ、そうだ」と考えるのは思索でないという趣旨に読みとれる。これは内向型の実感である。ひきこもりは、あってはならないことだと世間がみなしている今、「ひきこもるなんて、とんでもない」と言い、『ひきこもれ』と勤められるのが腑に落ちない外向型の学生がいる。しかし、『ひきこもれ』が書架から消えている日々があることから、『ひきこもれ』にひきこまれる学生がいることが想像される。外向型の学生は、他者のよいところを取り入れることによって成長すると感じているので、大学生活への順応をそれほど心配することはない。内向型の学生は、他者のよいところを取り入れると自己が自己でなくなると感じているので気がかりである。内向型の学生には順応は馴染まないのかもしれない。大勢のように順応するとしても、その前に自分らしさを発揮しようと試みる適応課題に取り組むので、この過程（否 を起点とする自己省察）を備えた教育環境や見守り支える教師が必要なのだろうと考える。初年次学生のなかには、初等・中等教育において、否 を思考の起点にする児童・生徒、疑問を掘りさげようとする児童・生徒であったためにこらむった苦勞ゆえに、自らを自らのままに発揮することを躊躇し恐れている学生が数多くいる。

ユングのタイプ論に拠って、初等・中等教育の先生たちに求められている指導的態度を分類するならば、それは外向・感情型⁸⁾の態度（「そうでありたい」の態度）に相応する。内向型の態度の場合には、私が「美しい」とか「良い」とか言うのは、私自身がそう感じるからであるが、外向・感情型の場合は、その言葉がその場にふさわしいと思うから「美しい」とか「良い」とか言う。なぜなら、私の主観にすぎない思いや気づきを正直に表明して、その場の流れや雰囲気乱すことになってはならないからである。外向・感情型の態度は、場をわきまえ、協調性を重んじる態度であり、学校世間では重視されている。児童・生徒として、学校に順応するには、自分をありのままに確かめる（自己モニタリングする）よりも、その場にふさわしい言動を探すことになる。教員のみならず児童・生徒たちも、その場にふさわしく振舞う自分を、期待されている自己とみなすようになる。外向・感情型の先生が生徒に言い聞かせる「一人の命であっても、それは地球よりも重たい」は、嘘でも偽りでもなく、私が疑問を関与させる余地のない外的に所与された期待に応える全うな答えである。内向型の子どもが児童・生徒であろうとして順応行為に終始すると、自己を発揮して試行錯誤する適応課題を体験しないまま学生になってしまう。周囲の期待を答えとして振舞えるが、さて、自分は本当は何をどうしたいのかを自らに問うことなど思いもよらない優秀な学生になってしまう。

内向型の学生になり代わって、最終レポートの作成を高い評価を得ようとする恋人選びに喩える

なら、自分が内に秘めた異性像に一致するように恋人を選ぶ(レポートを書く)のでなく、身分、年齢、身長、家柄などに関して、一般的な合理性にかなっているから恋人を選ぶかのように仕上げることになる。したがって、内向型の学生は、「よくできたレポートだった」と褒められても、それは装いを褒められたのであり、褒め手は本当の「私」のことを知っていないと思うことになる。

教師が、学校という組織の教育方針に従おうとすると、外向・感情型の態度を引き受けることになる。その結果、二者択一的判断である感情と補償し合う関係にある思考を用いない(考えない)人になってしまう。こうした先生に、内向型の児童・生徒は、手伝ってもらうことを拒否する。まだ処世術を身につけていない内向型の子どもは、描いている絵に「ほら、地平線をこう描くと、海が海らしくなるでしょう」などと、先生の手が入ったとたんに、その絵が自分の作品とみなせなくなる。せっかく自力で描いていたのに、行き詰まっていたとしても、「私」の絵を台無しにされたのである。外向型の子どもが、「先生、ありがとう」と言い、先生の手が入った絵を、「ほら、上手でしょう」と家に持ち帰って母親に自慢するのは対照的である。教えることに(優しく振舞うとはいえ、外圧として)熱心な先生にしてみると、典型的な内向型の子どもは集団としてのクラスをまとめるにあたって、厄介な存在である。ただし、互いにアドバイスし合って頑張っている先生とちがって、内向型の子どもは孤軍奮闘している。初等・中等教育において、こうした体験をした内向型の児童・生徒は、学生になって受けた向性検査の結果を見て、「僕(私)の向性は、変わらないのでしょうか。もっと外向型になりたいのですが?」と質問する。あるいは、「これはなぜか女子学生だが」「私は子どもの頃は内向型でしたけど、中学校で生徒会活動をした頃から、外向型になっているはずです。ですから、向性指数はもっと外向型のはずです。」と質問する。外来する情報の洪水に順応するには、外向型としての対処スキルの獲得に努める必要もあると思う。

3. 内向型の学生は学びつつあり、外向型の学生は教わりつつある

否 文レポートを書く学生のなかにこそ、授業レポートが回を追って変容し、(筆者の眼には)学びつつあると映る学生がいる。このことは、次のような課題でおおむね確かめることができる。数回目の授業で書いたテーマが与えられた自分の授業レポートを、学期末に加筆修正するという課題である。否 文レポートを書いた学生、つまり内向型の学生は、以前のレポートに所狭しと朱書きを入れる(ことができる)。文章を書き換えるうちに、「一から書き改めないと手に負えなくなりました」となる学生もいる。一方、諾 文レポートを書いた学生、つまり外向型の学生は、テニヲハを修正し、接続詞を工夫すると、朱書きが一段落としてしまう。なにしろ、誰にとってもまっとうなことを書いたのだから。

諾 文を書く外向型の学生は、教わろうとして授業に臨んでいるので、教師にしてみると教え甲斐のある学生である。否 文を書く内向型の学生は、学ぼうとして授業に臨んでいるので、教師にとって突き放し方を工夫し甲斐のある学生である。と分かっている、教師が自らの向性指数の定位置を遠く離れては身の入った授業にならないという大問題がある。ただし、小・中・高校と外向型を 諾 とする教育を受けてきた学生への大学教育として、内向型の学生が、我が意を得て伸び伸びと『ひきこもる』ことを許容する風土づくりも重要だと考える。

脚注

- (1) 社会ないし多数の二者択一的判断を拠り所にする外向・感情型の学生には「非難」と「批判」が未分化である。限界を指摘しただけで「非難」されたと受けとめ、限界を乗り越えるための提言あるいは試案に耳を貸すつもりがなくなっている。
- (2) 溜飲がさがるのは、不平、不満、恨みなどがなって胸のつかえがとれることなので、成敗してほしい誰かがいなければ、溜飲はさがらない。
- (3) 典型的な 諾 感想文を書いた学生と 否 感想文を書いた学生が、初回のオリエンテーションで提出した「授業の履修動機」についてのレポートを比較しながら読むと、前者が、授業で『偉い人たち・社会のリーダーたち・人間的に素晴らしい先輩たち』から『ためになる・役に立つ・とりいれるべき良いところがたくさんある』話が聞けることを期待しているのに対して、後者の動機づけには、そうした記述がない。講師の話から『私は何かを見出したい』といった自己への期待が書いてある。
- (4) 学生は問題解決能力を育成することを目指していたせいか、問題提起とは「解いて正しい答えにたどりつくように解きなさい」という指示のもとで提示されたと受けとめる傾向がある。解けないというトラブル(問題)を解決することのようである。問題とは、例えば、「題をめぐって問いを立てることだ」と教示しても、まず、正しい問いはどんな問いかを知りたがる。
- (5) 限界の指摘と提言をセットにして成立する批判を斉一性を妨げると教わってきた学生は、対立つまり互いの差異をめぐっての話し合いを体験していない。傷つきやすくなっていると指摘される学生たちは、対立を察知する感度を年々鋭敏にしている。互いに同じ意見や価値観をみつけて安心するのである。これには、コミュニケーションの大切さが金科玉条のごとく巷間でとりあげられることが影響していると考えられる。コミュニケーションが目指すところは、発信した情報がそっくりそのまま受信されることであり、発信者として考えをそっくりそのまま言葉にできないことにたじろき、受信者が言葉を受信者なりに意味づけることにもたじろく。したがって、時には、差異やズレについてやりとりするなかで、物事の意味や価値や概念が生成される(定義がくっきり浮かびあがる)こともあるという体験がない。最初に定義がなければ、やりとりができないという先入見は、養老孟司氏の言うところの『原理主義であり、原理主義はある意味で学問の敵である。』
双方向性のある授業が目指されているふしもあるが、学生にとっての双方向性は「あなたの言うとおり」と褒められることによって成立するかのようである。褒めることは叱ることと対になって、躰の手段なのだが、初等・中等学校で、学生たちは躰けるようにされる教育を受けてきているらしい。
- (6) 個を尊重するというのも、学生の実感として理不尽なことに思える場合があるようだ。移民や犯罪歴のある若者の社会復帰を支援する職業訓練校を運営するNPOのビデオをめぐる疑問について学生にメモ書きをしてもらった。162名中38名のメモが、高い教育費を払って大学まで出た者に職がないこともある時代に、社会に危険を及ぼす犯罪者や金を稼ぐためによその国からやってきた移民に無償で教育を受けさせて職業まで世話するのは理屈に合わない(偽善だ)といった内容だった。学生は、個を尊重するどころではないところまで追い込まれているらし

い。

- (7) 向性とは心的リビドーが向かう方向である。誰もがいずれの向性でも振舞えるが、個々の位置から遠ざかると、心的疲労がもたらされ、生き生きと自分らしく活動しているという実感が薄れてくる。本稿における向性は、採用した検査で算出された向性と定義しておく。
- (8) ユングは、2つの向性（内向・外向）と4つの優位心理機能（思考・感情・感覚・直観）を組み合わせてパーソナリティのタイプを8つ分けており、外向型にも4通りある。結論・目的・目標といった判断を重視している教育において優位な感情（正しい・間違い、好き・嫌い、優れている・劣っているといった判断）を、外向型の典型として、例示した。

（参考文献）

ユング, C.G. 1999 『タイプ論』(林道義訳) みすず書房

Pearman, R.R. & Albruttib, S.C. 1997 『I'm not crazy, I'm just not you : the real meaning of the 16 personality types』 Davies-Black Publishing

吉本隆明 2002 『ひきこもれ - ひとりの時間をもつということ - 』 大和書房